

ナレーター女..

可哀想な人魚がいました。
むかしむかし、あるところに、人間の王子に恋をしてしまった

彼女は美しい声と引き換えに、人間と全く同じ一本の脚を手に入れ、純粹なその心を占める王子のもとへと向かつたのですが、彼女の想いは報われず、悲しみに半ば張り裂けた胸を抱えたまま、海へとその身を投げ、やがて泡となり消えてしまつたのです。

しかし、哀しみの海へ沈んでいったのは、彼女だけではなかつた

ことを皆さんは存知でしようか。

人魚が身を投げたほの暗い海の底、泡になつた彼女を見上げながらその身を嫉妬の炎に焦がした青年がいたことを――。

人魚..

人間になりたいだつて?

ええ。どうしても一本足が必要なの。あの人に振り向いてもらつたためには、人魚のままでは駄目なのよ

ナレーター男..

人魚も深海魚も滅多には近づくことのない、ほの暗い海底の城。そこには人間と同じ手足を持ちながらも、皮膚の所々に漆黒の鱗を持つ水棲人の呪術師が住んでいた。

他人を陥れるための呪術を習いに来る者、実力以上の力を得るために秘薬を欲する者など、己の欲望に溺れ、堕落の道を選んだ卑しい人魚たちだけが現れるこの場所に、どうしてだか今日は妬みや支配欲などの心を一切持ち合わせてはいないのである、一人の純粹な人魚が珍しく訪れていたのだった。

呪術師..

呪術師 ..

わかつた。

三日後、またここに来なさい。人間になれる薬を渡そう

人魚 ..

(歓喜の声を思わず漏らす)

呪術師 ..

(複雑な心境で吐息を漏らし)

ナレーター男 ..

途端に眩いほどの輝きを放つた彼女の笑顔を

呪術師は恐ら

く一生忘れる事はないだろう。

彼女が心の奥底から人間に生まれ変わることを望み、王子との

再会を焦がれるほど、呪術師はその笑顔を腹の中で腐らせる。

なぜなら、呪術師は彼女に恋をしていたからだ。

呪術師 ..

これを飲めば鱗は剥がれ落ち、人間と同じ脚がたちまち生えてくる。

ナレーター男 ..

どうすれば、彼女の心を海底に取り戻すことが出来るのか。

どうすれば、地上を一本足で歩く人間の男を忘れさせることができる

出来るのだろうか。

なや 憶みぬいた拳句に呪術師が作り出した薬は、邪な思いと身勝手な感情に満ち溢れていた。その薬には三つの呪いがかけられていたのだ。

ひとつは脚と引き換えに人魚は声を失い、人間との意疎通は一切かなわなくなつてしまふというもの。

もう一つは、一步踏み出すたびに一本足は針を刺したような痛みに襲われるというもの。

そして最後は、王子の心を彼女が射止められなかつた場合、

彼女の身体は泡となり海へ消えていくというものだった。

しかし、君はその脚と引き換えに声を失うこととなる。万が一、恋が破れるようなことがあれば、その命までをも消し去るだろ。

呪術師
(落胆したような吐息)

人魚..

(一瞬怯んだように息を詰めるが、心を奮い立たせ)
あの人には逢えるのなら、声を失つたとしても後悔しません

呪術師..

(人魚の発言の思わず驚いて息を呑み)

正気か。声がなければ自分が命の恩人だと男に伝える術はない。
それに、あの男と結ばれなければ、君は泡になり、人魚にも人間にも戻れないんだぞ。そこまでして、何故、人間の男を……

人魚..

あの人と結ばれない生涯など、私には必要ありません。
例え命を失くしたとしても、あの人には逢えたら私は幸せ……。
どうか、その薬を私にください

ナレーター男..

あんなにも恋焦がれた彼女を引き止める力を持たぬ自らの非力さを呪術師は呪つたが、しかし、呪われた薬をして涙ぐみながら微笑み歎喜する彼女を一体、誰が止められたのだろう。コバルトブルーの美しい瞳には、既に人間の男しか見えていない。
どんなに呪術師が訴えかけたところで、死を覚悟した彼女の耳に届くはずもなく、それは呪術師が密かに抱き続けていた恋の終わりを証明していた。そして、運命の瞬間はやつてくる。

ナレーター男..

声が出来ぬもどかしさにも、一步踏み出すたびに痛む両足の枷

にも、彼女の決心と恋心を打ち砕くことは出来なかつたようだ。

解く方法を教えてくれと訴えてきたのは、あの薬を手渡してから一週間後のことだつた。

もちろん、呪いを解く術も用意されていたが、やはりそこには彼女が命を繋ぎ止める方法は、ただ一つ。呪術師の作り上げた宝剣で、その心を奪つた男の心臓をひと突きにすること。

男の死か、彼女の消滅か。宝剣を手にした姉たちは早速人間に姿を変えた可哀想な彼女の元を訪れたが、数日後に呪術師が海底から見たものは、泡となりエメラルドの海へと消えていくかのじよ。すがた。彼女の姿だつた。

(ガラスの割れる音)

(初めは感情的に、徐々に涙ぐみながら)

ナレーター男
結局のところ呪術師は、束縛するつもりが彼女を永遠の無へと還してしまつたのだ。

人魚としての幸せも、人間としての幸せも手に入れる事が出来なかつた彼女は、その身を海へ投げ出す瞬間に何を思ったのだろう。

呪われた薬を作り上げた呪術師を恨んだのだろうか。

いや、違う。泡となり消えるその瞬間まで、結ばれる事はなかつた己の哀しい恋の結末を受け入れながら、命と引き換えに愛した男を、胸を痛めながらも想い続けたに違いない。

苦悩の末に猛毒を差し出した呪術師の本心を知ることもないまま、ただ、叶わぬ恋の結末を小さな身体全身に受け止めて。彼女は、本当に幸せだつたのだろうか。

呪術師

「こんなもの……」
「なんもの、
「こんなもの……」
「ツ

ナレーター女

かわいそう にんげん むかしむかし、あるところに。人間の王子に恋をしてしまった
可哀想な人魚がいました。

王子は命の恩人が目の前で口を閉ざし、優しく微笑む少女だ
とは気付かぬまま、悪戯な偶然が重なったその結果、ほかの人間と
結ばれてしまつたため、人魚の恋が叶うことはありませんでした。

それでも、自分が眞の恩人だと気づけず、いた王子を恨むことも、
呪術師の作り出した薬を恨むこともなく、数百年後にその魂
は深海の底から救い出され、空へと還り、天上からいつまでも
王子の幸福を見守り続けたのです。

そんな彼女に思い焦がれ続けた呪術師は、今もなお海底の城で
ひつそりとした暮らしを続けていました。
何十年も、何百年も、自ら編み出した秘薬により姿を消し
てしまつた彼女の幻影を瞼の裏に蘇らせては涙に暮れ、他の

人間と結ばれてしまつた王子、そして自らの呪いを憎みながら、
いつまでも嘆き続けました。

それからまた、数百年の時が経つたある日のこと。

泡となり消え去つたはずの彼女と瓜二つの人間を難破船から
呪術師が救い出したことに、新たな恋物語が幕を開けました。
今度は呪術師が秘薬を飲み干し皮膚の鱗を取り払うと、その
命と引き換えに彼女との再会を果たすことになるのですが――。

一体、彼がどんな結末を迎えたのか。
それは、またの機会にお話しましよう。